

論文

現代日本語の受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙に関する考察
— 語彙意味論的アプローチ —A Study of Verb Semantics in a Case of Passive Auxiliary in Modern Japanese
-with Lexical Semantic Approach-

工藤 昭子

KUDO Akiko

1. はじめに

現代日本語の「ラレル」は、受身、可能、自発、尊敬を表す助動詞として知られている(尾上,1998)。「ラレル」は意味が多様で、視点の操作や格が交代するため複雑であり意味論的にも研究が期待される分野である。英語と比べて日本語表現の違う点として、英語は「スル型」で日本語は「ナル型」(池上,1981)であり、佐久間(1941)が指摘しているように日本語は「何者かにさうさせられるかのように表現する傾向」や「自然本位的で非人間的ともいへる」特徴がある。受身は行為者を背景化し、行為の影響を受ける人やもの、あるいは出来事を全面に出す機能を備えており、人が意志的に行うものではないことを表現するという点で、日本語が好む表現特徴を兼ね備えている。そのため日本語の受身文は複雑に発達している。本稿では助動詞「ラレル」の中でも、日本語的表現として好まれやすい受身助動詞に焦点を絞る。

現代日本語の受身文は、周知のとおり、一般に直接受身文と間接受身文に分けられる。直接受身文は A1)のような能動文を A3)のような受身文に転換して表されるものである。直接受身文には無生物が主語となる A4)のような「非情の受身」と呼ばれる文もある。非情の受身文は、動作主がだれであるかが問題にならないという特徴を持っている。また、A5)のように、「誰かがドアをあけた」という事態に、「弟」というその事態以外の受影者が主語として加わることによって間接的に影響を受けた事態を表す間接受身文(A6)が得られる。動作の対象が主語の所有物や身内などの場合も、間接受身文となる(A7)。日本語の特徴としてよく知られているのは A8)のように自動詞から間接受身文が作られる点である。

受身助動詞「ラレル」と共に用いられる動詞には、「あける・あく」のように、自他動詞の対応の有るものもあれば、無いものもある。日本語は、「西欧語よりも状態や過程をそのまま表現する自動詞が発達している」(中島,1946)。しかし、自動詞の対応がない動詞も多く、それらの動詞文の動作主を背景化するには受身助動詞「ラレル」が必要になる。自他動詞のある A2)のような自動詞文と A3)のような他動詞文の転換による受動文、A4)のような無生物を主語にする非情の受身では事態をどのように表すのかについて違いが見られる。複雑な受身助動詞「ラレル」についてより本質的な理解に至るには、日本語の動詞の意味と受身助動詞「ラレル」の関係を語彙論的に把握する必要がある。

本研究では、受身助動詞「ラレル」と共起した動詞語彙の用例をコーパスから抽出し、ラレル統語構造における動詞語彙の意味特性について考察し分類することを試みる。

- A 1)花子が ドアを あけた。
- 2)強風で ドアが あいた。(自動詞文)
- 3)(花子に) ドアを あけられた。(直接受身文)
- 4)ドアが あけられた。(直接受身文・非情の受身)
- 5)誰かが ドアを あけた。
- 6)弟は 誰かに ドアを あけられた。(間接受身文)
- 7)弟は 誰かに 自分のかばんの中を あけられた。(間接受身文・持ち主の受身)
- 8)愛犬に 死なれた。(自動詞による間接受身文)

2. 先行研究

2.1 日本語自動詞・他動詞～受身研究の変遷

動詞活用を日本語において体系づけたのは本居春庭(1808)であるということは、動詞活用研究では一般的に知られていることである。本居の活用研究書「詞の八衢」では、古語の文献の自他について「おのづから然する」(自動詞)、「物を然する」(ヲ格他動詞)、「他に然する」(ニ格他動詞)、「おのづから然せらる」(自発)、「他に然せらる」(受身)、「他に然さする」(使役)の6つに分けた。そして動詞活用の種類を四段、一段、中二段、下二段、変格の5つに整理し日本語学の文法学説に影響を与えた。松下文法では動詞を単念動詞、「帰られる」は「帰る」と「れる」の2概念あるため複念動詞と呼んだ。そして、すべての動詞には直接動と間接動の2用法があるとし、前者は、「親が死ぬ」のような能動文で、後者は「親が子に死なれる」のような「乙物の動作を甲物の間接的動作」として表すものだとし、現在の受身文種類の間接受身文につながる指摘をしている。間接動には被動態があるとし、「子どもが野良犬に足をかまれる」「雨に降られた」など、現代の持ち主の間接受身文や自動詞の間接受身文にあたる分類をしている。何よりも重要なのは「レル」が自動詞のような「自動」の意味を含んでおり、その本性が「依拠性」という「名詞+ニ」格を必要とするものであると述べたことだ。

山田孝雄(1908)は、受身助動詞の本質が「状態性」にあるとし、「属性を表す複語尾」のうち状態性間接作用を表すとした。そして山田は、動詞の自他分類を無用とする説を唱えた。佐久間(1936)は「動作のうけみ」、「利害のうけみ」の分類をしている点で松下文法に影響を受けていると考えられる(寺村, 1983)。三上章は主語存在論に反対の中で、動詞の自他区別の観念には次のような違いがあるとした。

表 1 三上章「主語抹殺論」から

	日本	西洋
自動詞	<u>自ら</u> 然する	<u>目的語</u> 不要
他動詞	<u>他を</u> 然する	<u>目的語</u> 必要

そして、三上は「用言の種類」の中で、自動他動の対立よりもっと大切なのは能動所動の区別であるとした。直接受身・間接受身のどちらかになるものを能動詞、直接受身・間接受身のどちらにもならないものを所動詞と分類した。所動詞には、「ある」「いる」「見える」「聞こえる」「できる」「可能動詞」など「ラレル」を添えた受身が成り立たない状態性を帯びた動詞が含まれる。金田一春彦(1950)のアスペクトに

よる動詞4分類の「状態動詞」と重なるものが多いが、能動・所動の対立を次のように述べた(三上, 1972:106-107)。

C	能動詞: ミズカラ	有情	動的
	所動詞: オノズカラ	非情	静的

日本語の自動詞の概念は「ミズカラ」と「オノズカラ」に分けており、有情非情の区別を昔から立て、自動詞からも受身形が作られるという点で、日本語固有の概念を持つ自動詞・他動詞があると主張した。所動詞の範囲は「物価が上がる→*物価に上がられる」など非意志的で「オノズカラ」自然にそうなるものが多い。

伝統的な日本語文法では、動詞の種類を自他動詞、主格が意志的・非意志的か、受身文にできる動詞か(所動詞)、行為者以外の関与者を主語に立てるかなどにより受身文を分類してきた。動詞の種類によりどのように受身を研究してきたか2. 3で見てみる。

2.3 日本語受身文で用いられる動詞の種類による研究

寺村(1983)は、受身文で用いられる動詞を、二者の関係を表す動詞について動作主 X の働きかけの種類によって3タイプに(D1)-D3)、移動動詞について3タイプに(1)出どころ:例 出る・卒業する、(2)通りみち:例 通る・走る、(3)到達点:例 乗る・到着する・沈む)、さらに変化動詞(例 化ける・発展する)、授受動詞(例 贈る・預かる・教わる)、「入れる・出す」類動詞(例 降ろす・出す・渡す・通す)、「変える」類動詞(例 増やす)、「コトを補語としてとる動詞」(例 見る・思う・言う)に分けた。

D1)について、主体の働きかけによってさらに3種類の下位分類があるとした。D1)-1)の例は「殺す、つかまる、助ける、くるしめる、割る」などで、客体 Y を目指してその感情の動きや感覚の動きを表すものである。D1)-2)の例は「愛する、憎む、好む、嫌う、恐れる、尊敬する」など感情・感覚の動きを表す動詞群である。D1)-3)は、「創る」類の動詞で例えば「建てる、作る」である。

D2)について下位分類が5つある。いずれも相手 Y が「ニ」をとるものである。一つ目は、「相手に物理的に影響を与えるもの」(例:かみつく、とびかかる、はなしかける、さわる)で、二つ目は「相手に対して主体が何らかの態度をとることをあらわすもの」(例:賛成する、反対する、そむく、逆らう、甘える、ねだる)である。三つ目は、「感情を表すもの」で、例えば「恋する、惚れる、あこがれる、感謝する」などである。四つ目は「相互動作に一步近づき、「ニ」格あるいは「ト」を用いることもできるものである(例:会う、相談する、当たる、ぶつかる)などである。五つ目は「事件、事態、関係を表すもので、「勝つ、負ける、面する、直面する、似る」のような動詞である。D3)は、「片方」格をとる相互動作の動詞と似ているが、受身化が可能な動詞群である。「結婚する」などである。

D1) Yヲ 殺す、愛する	(Yは主体の働きかける「客体」)	{ D1)-1 物理的・心理的働きかけ D1)-2 感情・感覚の動き D1)-3 創造
2) Yニ 会う、賛成する	(Yは主体の対面する「相手」)	
3) Yト 結婚する、衝突する	(Yは相互動作の「片方」)	

寺村文法により詳細に分類しているのだが、動詞語彙(例「さずける・さずかる」)レベルで意味的にも統語的にも受身的な用例の研究が十分ではないように思われる。また受身文と共起しやすい動詞語彙の分類研究の数が全体的に少ないこと、「ラレル」に後続する「ている」「てある」「ておく」「てしまった」などを合わせた考察を行った研究が十分になされているとはいえないことがラレル研究の課題である。

2.4 動詞語彙分類に関する研究—アスペクト研究—

語彙的アスペクトによる動詞分類については、Vendler(1967)、Comrie(1976)、金田一(1950)、森山(1988)、影山(1996)、出水(2018)、岩本(2008)らにより研究されている。

Vendler(1967)、Comrie(1976)の研究は、英語動詞を語彙的アスペクトから分類したものである。Vendler は動詞をその語彙的アスペクトにより4分類した。「状態動詞(例: know)」「到達動詞(例: recognize)」「活動動詞(例: run)」「達成動詞(例: make, paint)」である。「状態動詞」は、いつ始まりいつ終わるかという時間的な概念とは無縁のものである。「到達動詞」は何かの目標の到達点に達するという到達点に重きを置いた動詞である。「活動動詞」は意志的に行うもので、「V+ing」とすると進行中を表す。「達成動詞」は、何か活動して最後には目標状態に至ることを意味する動詞である。Comrie は、動作パーフェクトにより語彙分類した。動作パーフェクトとは工藤(1995:99)によると「ある設定された時点において、それよりも前に実現した運動がひきつづき関わり、効力を持っていること」だと言う。区別すべきアスペクトとして「状態と動作」「持続と瞬間」「ある状態あるいは過程にあること・ある状態あるいは過程に入ること・ある状態あるいは過程を抜け出すこと」「完了・未完了」があると主張した。しかし、Vendler の研究もComrie のも、英語を対象とした分類であるためそのまま日本語研究の参考とはならない。

金田一(1950)は、日本語の動詞に「している」形が持つ意味を中心に動詞を分類しようとした。動詞の内的アスペクトが「している」のアスペクトを決めるという主張を行った(表2)。しかし、「動詞+ラレル」という助動詞と共に用いられる動詞語彙を分類する場合には、新たな研究が必要である。

影山(1996)は、自動詞を人間が行為をするものを非能格自動詞(例: talk, run)と主格が無情の非対格自動詞(例: be, happen)とに分けた。さらに認知言語学の事象を把握するモデルである「ピリヤード・モデル」(Langacker, 1991)を用いて事象を「行為者が道具を経て対象物に働きかけて働きかけの結果生じる状態の発生」というように行為連鎖が起こるものと考えた。影山の動詞分類は、非能格活動動詞、非対格到達動詞、非対格状態動詞の3つを主張している。

出水(2018)は、Levin and Rappaport Hovav(2013)を参考に「どのようにしてそうなったのか」という様態が結果動詞であると述べた。しかし、どのような結果状態になるかを語彙化しているので「状態変化動詞」と呼び、それらの例として「壊す、割る、満たす、からにする、溶かす、開ける、砕く」があるとした。日本語の動詞の特徴は、「どのような行為の様態を語彙化し、その結果どうなったのかをあらわす様態動詞」だと述べている。つまり「～になるようにする」動詞であると主張した。

このように、動詞語彙タイプは主にアスペクト研究で積極的に行われてきた。しかし助動詞「サセル」から語彙分類を試みる研究(早津, 2016)も試みられるようになり、複雑に発達している受身助動詞「ラレル」の動詞語彙分類を行う研究も求められる。しかしそのような研究は数が少なく、ラレル研究において注

目されている研究分野である。

表 2 アスペクトによる動詞分類研究 1

Vendler, 1967 の動詞分類			
1 状態(states)	2 到達 (achievements)	3 活動(activities)	4 達成(accomplishments)
例 know, believe, desire, love	例 recognize, spot, find, lose	例 run, walk, swim, push a cart, drive a car	例 paint a picture, make a chair, recover from illness
金田一, 1950 の動詞分類			
1 状態動詞(「ている」 をつけると不成立)	2 継続動詞(「て いる」がつくと動 作進行中を表す)	3 瞬間動詞(瞬間におわる。 「ている」がつくと、その動作作 用の結果が残存)	4 第4種の動詞(「ている」 で用いられ、ある状態を帯び る)
例 (机が)ある、でき る、切れる、値する	例 読む、書く、 笑う	例 結婚する、死ぬ、消える、 到着する、忘れる、止む	例 そびえる、優れる、富む、 似る、ばかげる、ありふれる
影山, 1996 の動詞分類			
1 非能格活動動詞	2 非対格到達動 詞	3 非対格状態動詞	
例 write, sell	例 talk, quarrel	例 be, happen	
出水, 2018 の動詞分類			
1 様態動詞		2 結果動詞	
行為動詞	移動様態動詞	状態変化動詞	移動結果動詞
殴る、拭く、ける	歩く、走る	殺す、壊す、開ける	着く、入る、落ちる

2.5 語彙意味論

語彙意味論とは、語彙の意味の詳細な記述ではなく、語彙の意味が現れる統語構造や形態を決定する意味特性を抽出する理論である。1970年代に生成意味論を基盤とした Lakoff(1971)やその流れを汲む Jackendoff(1983)による語彙意味論、その発展といえる影山(1996)により議論されてきた。近年においても、動詞の様態と結果の相補性に関する研究(出水, 2015)、アスペクトの研究(岩本, 2008)などにより、語彙意味論は、語彙と項構造や事象構造との対応を一般化することを目指す理論として注目されている。

語彙意味論では、述語の概念的意味が変化(BECOME)、状態(BE)のような意味関数で表される。1970年代の生成意味論では、「John killed the rat」が「John CAUSE the rat to BECOME NOT ALIVE」のような意味構造から派生すると考えられ、意味構造が統語構造と同一視されていた。しかし意味構造と統語構造が同一であることに問題があるという議論が持ち上がり、「現在では生成意味論の枠組みをそのまま用いる理論はない」(影山, 1996)。述語の概念的意味を(BECOME)など「統語的に意義のある意味特性」のみを抽出したものが語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure、以下 LCS)を用いた研

究が主流である。LCSによる動詞の意味クラスは研究者により多少の違いはあるものの次のようにあらわされる(由本, 2018:351)。

- D 1) [y BE [AT-z]] 【状態】 例 (東京)にある、暗い, know, believe, have, desire, love
 2)[y BECOME [y BE [AT-z]]] 【到達・変化】 例 寒い, paint, make, deliver, draw, recover
 3)[x ACT ON y] 【活動】 例 run, walk, swim, push, drive
 4)[[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE [AT-z]]]] 【達成】 例 y を冷やす, y が冷える, recognize, find, loose, die

LCS の優れているところは、動詞の語形成や意味拡張、動詞の可能な形を予測する道具として機能するところであるだけでなく、動詞の多義性についても意味場の違いとして説明できるところである。しかしLCSによって話者の立場や視点、感情など内的過程を推測することは難しい。

日本語についての語彙意味論研究は、日英語の自他動詞交替について述べた澤田(1994)があり、動詞構造を Argument Structure と Lexical Structure に分け、「太陽が氷を溶かした」(二項動詞)、「氷が溶けた」(一項動詞)のように自動詞と他動詞では項数が異なり、語彙情報を表層で具現していることを指摘している。接辞として「tok-asu」「tok-eru」という「-asu」「-eru」が付加しており、「荒らす・荒れる」「枯らす・枯れる」のような事物の状態変化を表す動詞に多く、日本語の所謂「母音動詞」が移動し「-eru」がつくと自動詞になり、「-asu」がつくと他動詞になるような派生があることを示していると主張した。Eのように、変項 y で表される項が「が」を、変項xで表される項が「を」を持つ項に対応付けられる。「y がxを溶けた状態にする」意味を表すと述べ、語幹 tok が接辞 asu の付加によって、項構造と語彙構造に変化をもたらすと仮定することで、他動詞「溶かす」が表層で二項動詞であると説明できるとしている。

E tok+asu: Argument Structure: (y (x))
 Lexical Structure: [y CAUSE [x GO TO Liquid]]

2.6 受身助動詞「ラレル」研究の課題

受身助動詞「ラレル」はもともと多義性があり、視点操作や格操作、主格にくるものが有情かなど制約が多く複雑な文法項目である。そのため、受身助動詞「ラレル」と共起する動詞分類がよりシンプルに分類できる見解が見いだされることが求められている。これまでの先行研究では、アスペクト研究において、区別すべきアスペクトとして「状態と動作」「持続と瞬間」「ある状態あるいは過程にあること・ある状態あるいは過程に入ること・ある状態あるいは過程を抜け出すこと」「完了・未完了」があるという理論が確立しており、日本語動詞は「ている」を後続させることで統一感のある動詞分類ができることが研究成果によりわかった。しかし、本研究が対象とする受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙を分類するための区別すべきアスペクト項目については、統一された見解が見い出されていない。そのため、量的に多い用例を分析できるコーパス調査をもとに、これまでの動詞分類の知見を踏まえた上で研究を積み重ねる必要がある。そのため本研究の目的は次のようなものに設定した。

3. 研究目的

受身助動詞「ラレル」と共起する動詞の語彙の分類を試みる。

4. 方法

国立国語研究所の現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)、日本語話し言葉コーパス(CSJ)から「れる・られる」を語彙素として検索したデータを用いる。「ラレル」と共起した受身を表す意味を帯びた文で用いられた動詞を抜き出し、頻度、相互接続形式から整理する。語彙意味の意味特性を分析する。

4.1 用いたデータと分析方法

現代日本語書き言葉均衡コーパス(BCCWJ)で語彙素に「れる」「られる」を入力し、コーパスの「コア」(新聞、雑誌、書籍、白書、ちえぶくろ、ブログ)を選定した。1990年代と2000年代に絞って検索したところ、1027件の用例が得られた。また、日本語話し言葉コーパス(CSJ)も同様に「れる」「られる」を入力し、コーパスの「コア」(独話:学会、模擬、朗読、再朗読、対話:学会、模擬、課題、自由)を対象に検索した結果、985件の用例が得られた。これらのデータをエクセルの機能によって、書き言葉、話し言葉別に、語彙ごとに頻度数を算出した。また動詞ごとに、話し言葉が現れる率を算出した。「受身」「自発」の用例を受身助動詞「ラレル」のデータとして分析した。「可能」「尊敬」は対象から除いた。

本研究は「動詞+受身ラレル」の「ラレル」を助動詞というよりは接辞のように捉え、「動詞+ラレル」でひとまとまりの意味を帯び、文の中で統語的にどのような意味特性を持つのかを考えながらこれまでの知見から得られた日本語受身文の分類(森田,2007)、本研究で得られた受身ラレル動詞語彙データを参照して、動詞語彙分類を行った。

5. 結果

5.1 受身助動詞「ラレル」と共起する頻度の高い動詞

表3は、コーパスから得られた用例のなかで、助動詞「ラレル」と共起された動詞語彙で頻度数が高い順に表したものである。頻度数の高いものは、話し言葉にも書き言葉にも高い率で現れることが多い。14動詞のうち、2動詞が80%以上、1動詞が70%以上、2動詞が60%以上、2動詞が50%以上であった。「ラレル」と共起しやすい動詞は、14動詞中7動詞で50%以上の割合で話し言葉にも書き言葉にも使用されやすいことがわかった。話し言葉比率をみると、「捉える」83.33%、「挙げる」81.48%と高く、続いて「用いる」が70%代で高かった。逆に「寄せる」「伝える」は書き言葉比率が高いことがわかった。

表 3 「ラレル」と共起する頻度数の高い動詞語彙

		話し言葉頻度	書き言葉頻度	総頻度	話し言葉比率
1	見る	163	107	270	60.30%
2	考える	122	93	215	56.70%
3	得る	70	36	106	66.00%
4	用いる	33	11	44	75.00%
5	挙げる	22	5	27	81.48%
6	与える	22	16	38	57.89%
7	認める	14	31	45	31.11%
8	捉える	10	2	12	83.33%
9	求める	4	40	44	9.09%
10	感じる	2	26	28	7.14%
11	伝える	2	15	17	1.17%
12	支える	1	12	13	7.69%
13	勧める	1	13	14	7.14%
14	寄せる	0	10	10	0%

5.2 コーパスのなかの受身助動詞「ラレル」と共起する頻度の高い複合動詞

図1は、複合動詞のなかで、話し言葉コーパスと書き言葉コーパスにおいて助動詞「ラレル」と共起する頻度の高いものを表している。「とりあげる」は、話し言葉にも書き言葉にも用いられやすいことがわかったがそれ以外の複合動詞は、書き言葉または話し言葉どちらかの言語スタイルだけで用いられる傾向があることが本データから見られた。

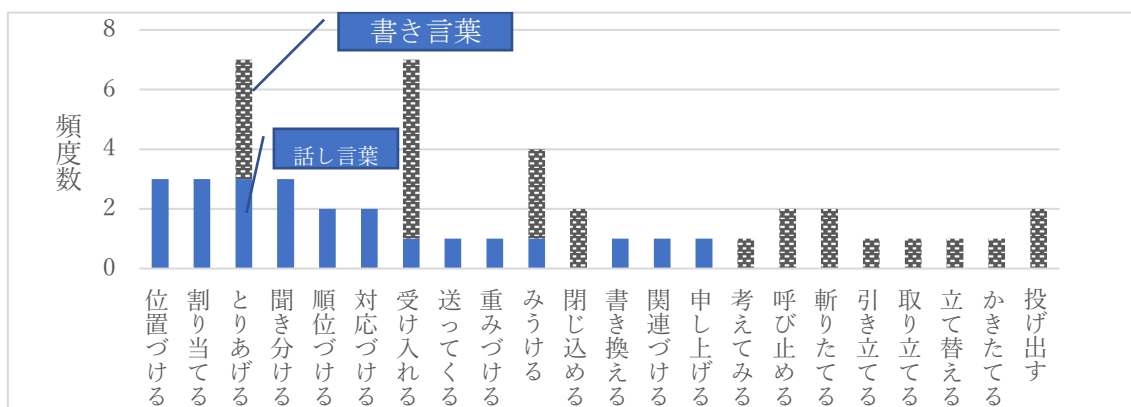


図1 話し言葉および書き言葉コーパスの受身「ラレル」と共起した複合動詞語彙

表4は話し言葉および書き言葉コーパスにおいて助動詞「ラレル」と共起した「動詞語彙」の異なり語彙を頻度数の高い順に並べたものである。

これらの結果をもとに考察では受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙の分類について考える。

表4 話し言葉・書き言葉コーパスで受身「ラレル」と用いられた動詞群（頻度順）

<p>見る、考える、得る、用いる、挙げる、与える、認める、捉える、閉める、わかる、集める、付ける、求める、述べる、あてる、入れる、換える、感じる、伝える、つなぐ、とどめる、甘える、言う、終える、おさえる、期待する、決める、試みる、支える、信じる、する、育てる、そろえる、助ける、確かめる、捉える、立てる、出る、投げる、まとめる、みつける、向ける、理解する、論じる、掲げる、寄せる、命じる、秘める、授ける、ちりばめる、攻める、止める、例える、任じる、込める、訴える、脅かす</p>

6. 考察

6.1 受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙の本研究での分類

表5が本研究のラレル受身動詞6分類の提案である。

早津(1995:179-180)は、有対他動詞には、「働きかけの結果の状態に注目する動詞(例:乾かす)が多い」、無対他動詞には、「働きかけの過程の様態に注目する動詞が多い」(例:干す)と指摘した。前者は「乾かす」手段が日光でも乾燥機でもよく問題視されていない。「干す」は洗濯物を干す一連の作業を表しており洗濯物の水分がなくなることについては問題にされていない。つまり何に焦点を当てようとしている動詞語彙表現かが重要であることがわかる。受身助動詞「ラレル」は無対他動詞を受身にするときに用いられるため「干す」型の一連の作業が被影者に影響を与える表現であるといえる。本研究の結果を、「動詞+ラレル」によって、「状況重視」「結果重視」の意味がもたらされるというところから分類を行った。

寺村(1983)では「コトを補語としてとる動詞」として「見る・思う・言う」を分類した。本研究ではこれらを「1. 事象判断動詞」、事象に対し話者が判断する「見られる」「言われる」など総合的に判断することに焦点を置いた意味をもつ動詞として分類した。「ラレテイル」になると普遍的事態あるいは長期間にわたりその事象が捉えられているという意味を表す。主格には抽象名詞(例:価値)が好まれるものも含む。二つ目の「容器動詞」は「動詞+ラレル」で情報やものが入る、あるいは動詞語彙の意味が維持されるような動詞群である。例えば、「得られる、集められる、とどめられる」などである。三つ目は「接触動作動詞」である。直接動作が行われときには被影者が物やコトに直接接触するかのように第一次的に経験するような動詞である。例えば「用いられる、換えられる」である。四つ目は「一方的勢力動詞」である。これは「動作主に主格が要求されたように感じた」結果、用いる動詞群で、例えば「求められる、甘えられる、向けられる」などである。寺村(1983)では「二者の関係を表す動詞」の「Yニ 会う、賛成する (Yは主体の対面する「相手」)(D2)に相当すると考えられ、「相手に対して主体が何らかの態度をとることをあらわすもの」(例:賛成する、反対する、そむく、逆らう、甘える、ねだる)」に分類されているものと「殺す、つかまえる、助ける、くるしめる」など D1-1 に分類されているものにあたるのではないかと考える。五つ目は「時間・移動動詞」である。動いたり、移動したりすることで被る状態や、始まったり終わったりする時間に関する動詞群である。

最後は「完成成就・発見動詞」である。例えば「見つけられる、作られる、育てられる、そろえられる」などその動作が完了すると完成したり目的が成就したり発見できるような動詞群である。

残る問題は寺村(1983)にあった D1)-2 の感情・感覚の動きを表す動詞を、「1. 事象判断動詞」の下位分類として設けるかである。本研究では感情に関する用例が少なかったため今後の研究の課題としたい。

表5 本研究での「ラレル」受身動詞の分類

1. 事象判断動詞	2. 容器動詞	3. 接触動作動詞	4. 一方的勢力動詞	5. 時間・移動動詞	6. 完成成就、発見動詞
話者が判断して表す(「テイル」がつくと普遍的事態)(抽象名詞好む)	情報やものなどが入る。(「テイル」がつくと維持の意味。自然現象も表せる。)	直接、動作が行われるもの(持ち主の受身も含まれる)	動作主に主格が要求されるような一方的な勢力があるもの(プラス・マイナス評価)	時間・移動に関わる動作	何かをして完成したり作られたりする完成成就・発見を表す
例 見る、与える、認める、述べる、感じる、言う	例 得る、集める、付ける、入れる、とどめる、	例 用いる、占める、あてる、換える、投げる	例 求める、甘える、向ける、脅かす 助ける	例 終わる、動く	例 みつける、育てる、そろえる、たてる

6.2 受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙の本研究での LCS

影山(1996)は、結果状態の焦点化という認知作用が日本語にもみられると述べている。そのイメージを「動詞+ラレル」が共通して持つものとして「結果状態の焦点化」があると本研究では仮定する。そのため LCS 概念では引き起こされる、生じるような[CAUSE]概念があると考えた。

Langacker(1990)が提唱した「ビリヤード・モデル」は球状の物体がエネルギーを伝達しあうように事態を理想化する「事態認知モデル」を提唱している。この中から、エネルギーの伝達の連鎖を取り出したものがアクション・チェーン「行為連鎖」と呼ばれるものである。影山(1996)でも行為の連鎖として「行為→変化→結果状態」というモデルを使って動詞意味について分析されている。影山は結果状態の焦点化という認知作用が日本語にも英語にもみられると述べ、そのイメージを「結果状態の焦点化: 行為→変化→結果状態」とし、「結果人間の生活において、出来事や行為が完了したかどうか重要な意義を持ち、完了・未完了の区別に対して特別な反応の仕方が身につけているからであろうと推測している。

当然話題やジャンルによって使用される語彙が異なることが考えられる。しかし、話し言葉で用いられた動詞語彙の異なり語数 42、書き言葉コーパスで用いられた動詞語彙の異なり語数 37 を受身助動詞「ラレル」語彙として捉えた。なぜなら「ラレル受身動詞」であり、ラレル受身動詞による事象は、図2のように着目するポイントが行為の影響を受ける人・モノであること、影響が起こり始めること、影響が起こっていること、影響が終結したという流れに関わるからである。

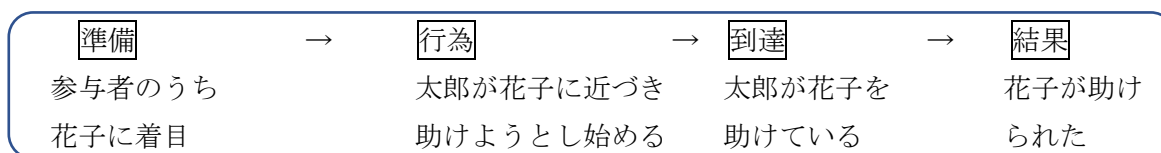


図2 行為から結果への流れ（筆者が影山 1996 を参考に加筆）
（「太郎が花子に助けられた（他動詞・直接受身の場合）」）

LCS によりそれらの動詞を表してみた。先行研究では、BECOME は瞬間に終わる出来事を表す概念（影山, 1996:57）であり到達の意味も表す。日本語の自然発生的な動詞はある状態になるとして（BECOME）（影山, 1996:67）で表される。ACT は主語の動作主ないし行為者（Pinker, 1989）として用いられる。BE には物理的存在を表すものと抽象的状态を表すものがある（影山, 1996:67）。本研究では「ラレル」受身であるため [CAUSE] を用い、「時間・移動」「完成成就・発見」は「瞬間に終わる（BECOME）」、「完成成就・発見」には「そうなる意味（BECOME）」があるため [CAUSE[BECOME]] で表した。容器動詞には、物理的存在や抽象的存在が関わるため [CAUSE[BE]] を用いた。「接触動作動詞」は動作主が関わるため [CAUSE[ACT]] で表した。先行研究には見られない「考えられる」などの事象判断動詞はどう感じ、どう捉えるかという概念として [FEEL] を用いることにした。また一方的勢力動詞については [ASK] という一方向からの勢力の流れを示す概念を用い [CAUSE[ASK]] で表すことにした。

本研究の受身ラレル動詞語彙の LCS

事象判断動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[FEEL [x CONSIDER, SAY, LOOK, CATCH, FEEL]]
容器動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[BE [x GET, COLLECT, PUT ON, KEEP]]
接触動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[ACT [x HIT, TOUCH, USE]]
一方的勢力動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[ASK [x ASK, AIM, SPOIL, THREATEN, HELP]]
時間・移動動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[BECOME[x MOVE, GO, FINISH, START]]
完成成就・発見動詞	Lexical Structure:[y CAUSE[BECOME[x FIND, RAISE, BUID]]

6.3 まとめと今後の課題

本研究では受身助動詞「ラレル」と共起する動詞語彙の分類を6つに行った。また受身助動詞「ラレル」と用いられるときの動詞について、語彙概念構造を示した。本研究の考察はまだまだ、吟味を重ねて改良する余地があることを承知している。今後は「感情・感覚の動きを表す動詞」の用例についても分析したい。また用例調査や語彙分類の判断性について調査を重ねていきたい。

(参考文献)

- Bernard, Comrie.(1976) *ASPECT: An Introduction to the study of verbal aspect and related problems*, Cambridge University Press: New York, Melbourne
- 出水孝典.(2015)「様態・結果の相補性からみた動詞 move」『JELS 日本英語学会大会・国際春季フォーラム研究発表論文集』32, pp.3-9.
- 早津恵美子.(2016)『現代日本語の使役文』ひつじ書房.
- 早津恵美子.(1995)「有対他動詞と無対他動詞の違いについて一意味的な特徴を中心に一」須賀一好・早津恵美子編『動詞の自他』ひつじ書房, pp. 179-197.
- 池上嘉彦.(1981)『「する」と「なる」の言語学一言語と文化のタイポロジーへの試論一』大修館書店.
- 岩本遠徳・井本亮.(2008)『事象アスペクト論』開拓社.
- Jackendoff, Ray.(1983) *Foundation of Language: Brain, Meaning, Grammar, Evolution*, Oxford University Press: Oxford, New York, Auckland, Cape Town, Dar es Salaam, Hong Kong, Karachi
- 影山太郎.(1996)『動詞意味論』くろしお出版.
- 金田一春彦.(1976)『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房.
- Lakoff, George.(1971)“On Generative Semantics,” In D. Steinberg and L. Jakobovits(eds.), *Semantics: An Interdisciplinary Reader in Philosophy, Linguistics and Psychology*, Cambridge University Press: New York, pp.232-296.
- Langacker, Ronald.(1990) *Grammar and Conceptualization*, Mouton de Gruyter: Berlin and New York.
- Levin, Beth and Makla Rappaport Hovav. (1991) “Wiping the State Clean: A Lexical Semantic Exploration,” *Cognition* 41, pp.123-151.
- 松下大三郎.(1896~1897)「動詞の自他(1)~(4)」『国学院雑誌』3-2.3.7.11.
- 松下大三郎.(1928, 1930)『改選標準日本文法』紀元社
- 三上章.(1972)『現代語法序説一シンタクスの試み一』くろしお出版
- 本居春庭.(1808)『詞八衢』(須賀一好・早津恵美子編(1995)『動詞の自他』ひつじ書房所収, pp. 7-12)
- 森田良行.(2007)『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版.
- 中島文雄.(1946)「格助詞の「が」と「は」」市河博士還暦記念会編『市河博士還暦祝賀論文集第2号』研究社出版, pp. 125-132.
- 尾上圭介.(1998)「文法を考える 5 出来文(1)」『日本語学』17 卷 7 号, pp.76-83.
- Pinker, Steven.(1989) *Lernability and Cognition*. MIT Press.
- 澤田茂保.(1994)「語彙意味論による英語・日本語の自他交替の分析について」『高岡法科大学紀要』5, pp.67-89.
- 佐久間鼎.(1941)『現代日本語の表現と語法』くろしお出版.
- 寺村秀夫.(1983)『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版.
- Vendler, Zeno. (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press: New York.
- 山田孝雄.(1908)『日本文法論』宝文館.
- 由本陽子.(2018)「語彙概念構造」日本語学会編『日本語学大辞典』東京堂出版, pp.351-352.